

# 植芝盛平翁の昇天

五井昌久

合気道創始者植芝盛平翁が、去る四月二十六日昇天された。翁は私とは非常に親しい仲で、肉体的にはそう度々お会いすることはできなかったが、霊的には常に交流しあっていて、私の会の人たちが伺うと、心から懐かしがられ、私と一緒に写した写真をみせては、「五井先生はいつも私と一緒にいらっしやる」と例の鋭い眼が、にこやかな柔和そのものの眼になっ

てしまわれる、という話であった。

昇天の日が近づかれた頃は、体のご不自由なものとわず「五井先生のところへ案内してくれ、今から市川へ伺う」と会の人の顔を見ると、子供のようにせがまれたそうである。

植芝先生は、武道修業の極致から、霊覚を得られた方で、天地の理法をはつきり知っておられ、人の心を見透すことは勿論、その人の霊位までも見極められる方であって、私との初対面から「五井先生は祈りの御本尊であり、中心の神の現

われである」といわれ、私が植芝先生を上座に据えるのを、自ら下座に坐わられ、若輩の私に上座をすすめられたものであった。真理に徹しておられぬとなかなかそういうことができものではない。

植芝先生の肉体というのは、普通人の肉体ではなく、神霊そのものの体であって、宇宙の根源に統一できる体であった。だから、八方から槍で囲んで、同時に打ってかかっても、打ってかかったほうが、まるでわざと倒れるような格好で、一度に倒れてしまい、当の植芝先生は、小ゆるぎもみえぬそのままの状態で立つておられる。その状態はもう技というものではなくて、翁の肉体が透明になり切り、宇宙大に拡がってしまっている状態なのである。

そういう真の姿を知っているのは私だけかも知れない。翁はいつも、「私のことを真実に知っているのは五井先生だけ

だ」と高橋君（註 白光真宏会前副理事長）などによく話されていたという。私が神人植芝盛平翁を稱うという詩を、大きな額にしてお贈りしたら、それが嬉しくてたまらぬらしく、来る人ごとに私の話をしてきかせていたようである。

昇天一ヶ月位前に、昌美と一緒にお見舞に伺ったら、ちょうど病院から帰って来られた直後で、昌美が掌を背中当てるお祈りすると、「魂の立派なお嬢様だ、光がよー通る。よー通る」と大変喜ばれ、大分体の痛みが和らいだようであったが、天寿はいたし方なく、神界に昇ってゆかれてしまった。昇天された日に新聞の写真を通して、私の体にうつって来られたが、その姿は、猿田彦命そのままでもあり、天叢雲九鬼さむはら竜王と常に翁がいわれていた竜王の姿でもあったが、神楽舞を舞われつつ、私の印の中に融けこんでゆかれた。その時、「祈りによる平和運動に全面的に参加する」というひびきを伝えてゆかれたのであったが、今この原稿を書いている私の体の中で、にこやかな笑顔をむけられているのである。

この世に再び現われるとも思われぬ、不世出の武人霊覚者は、この世とあの世の人々を、宇宙法則のひびきに乗せるため、救世の大大光明波動の中で、大いなる働きをつづけてゆかれるのである。

翁が開かれた合気の道は、全く平和の道であって、真の武とは、たすを止めるという文字の示す通り、戦争や争いを止める道なのである。植芝先生こそ、正に世界において、はじめて武の奥義に達した人といえなく、昇天して私と共に平和運動に働かれることも、すでに神界において定められた道であったのだろう。植芝盛平先生の神界における今後の活躍を期待すること大なるものがある。

大いなる合気の神の加はりて平和の祈り光いや増す

（高橋英雄編著『武産合気』より）